

夫から妻へ side-A

私があなたを  
あなうとき  
想

断酒の日々

未成年者も当然のようにビールを飲まれた。最初は苦くてまずかったのに、あの頃からなぜか、飲み始めるとやめられなかった。

男性は厳格な家庭に育った。エリート会社員の父の前では、いつも緊張した。一人息子を思っただか、父は何かにつけて「あせえこうせえ」と指図してくる。口癖は「つまらんやつじゃのう」。言われるたびに自分が駄目な人間に思えた。全寮制の高校を選んだのも、あの家から逃げ出したかったからかもしれない。

1面から続く

「酒、酒、酒…。いつも飲むことばかり考えてました」。広島市の60代男性は振り返る。酒を断って10年余り。今でも不安で仕方ないという。分かるんです。一口でも飲んだら、また絶対やめられなくなる」

酒を覚えたのは18歳の時。大学の新歓コンパで

学校教諭になって5年目、その父の勧めで妻と



父の仏前で手を合わせる男性（奥）と妻（撮影・高橋洋史）

# 積み重ねた3700日 穏やかな日常守るため



断酒カレンダーは10年前から使い続けている

見合いをした。結納の日。早速、やってしまった。散々に酔い、いさめようとした妻の叔父と取っ組み合ったらしいが、記憶すらない。おわび行脚し、何とか許してもらった結婚だった。

なのに、新婚生活はうまくいかなかった。妻は仲良し一家でおおらかに育った末娘。自分とは違つた。だんらんのない家庭で育ったからか、食卓で妻と向き合うのが苦手だった。目線が気になって「何で見るんや」と言い放ち、泣かせてしまったこともある。

職場では担任と部活の顧問を受け持ち、授業だけでなく行事も任せられた。ささいなつまずきも引きずる性格。生徒や保護者、同僚との関係にも気をもみ、疲れ果てていた。

酒は、職場での失敗や弱い自分を忘れるための手段だった。「夜には飲める」と思えば、日中を何とかやり過ごせた。帰宅したらすす、誰もいな

い応接間に直行し、ひたすら酒をあおった。酒量はどんどん増え、2日もあれば一升瓶が空いた。

自分でも「このままじやダメだ」との思いはあったのだ。酒を減らそうと試みたこともある。でも我慢できなかった。飲み始めるのと歯止めが利かない。必死の形相で止める妻の声も聞こえなくなる。酒代が足らなくなるのと、子どもの貯金箱に手を出した。

妻は諦めと侮蔑の表情を浮かべるように。子どもたちは男性が帰宅すると自宅に姿を消した。ある晩、酔って自宅の階段を転げ落ち、あばら骨を折った。すると、妻は勝手に依存症の専門病院を予約してきた。医師に入院を勧められると、知らないうちに学校長から休職の了承まで取り付けてきた。

入院後、男性は震えが止まらなくなった自らの

手を見て初めて、「病氣なんだ」と自覚したのだという。投薬治療やカウンセリングを経て、2ヵ月後に退院。以来、何か一滴も飲まずにいる。それでも「まだまだ危ない」と言う。今でもテレビCMを見ながら、冷たいビールを飲む瞬間を想像してしまうことがある。「『ああ、うまい』と思ってしまうんです」そんな自分を制してくれるのはやはり、家族の存在だ。妻はこんな夫を見捨てなかった。通院にも自助グループの活動にも必ず、付き添ってくれる。最近、娘が喫茶店に誘ってくれるのもうれい。

家族との会話はまだ、ぎこちない。妻が時折、暗い目で自分を見ることもある。そんな時は、息を潜めてやり過ごすしかない。今の自分ができるのは、妻との穏やかな日々を守ることに。断酒を一日、また一日と積み重ねていく。今日でちょうど断酒3700日。（編集委員・田中美千子）

妻から夫へ

妻の目線から夫への想いを描いた「side-B」はこちら↓

